

5 ボッカッチョ『デカメロン』¹⁾



図1 ペストを避けて集まった庭園で百話を始める10人の男女

(BnF fr. 129, f. 1r, 最初のページ、

Laurent de Premierfaitによるフランス語訳写本、15世紀)

1 『神曲』から『デカメロン』へ

天国編第三十三歌、いよいよ見神の願いかなって、『神曲』は次の詩句でもって終わる：

その時、私の心は一瞬の閃光〔恩寵〕に貫かれ、願いは満たされた。
その愛〔神〕は、もう私の望み〔知性〕と想い〔心性〕を同じように回していた、太陽と他の星ぼしを動かすあの愛は。(Par.XXXIII.140-45)²⁾

そして半世紀たらず、『デカメロン』は次の語句とともに始まる：

人間的なことです、苦しみ悩む人たちに同情するのは。(Pr.2)³⁾

しかもその「苦しみ悩む人たち」とは、現世での罪と来世での罰のためではなく、ほかでもない「恋の苦しみ」に悶える、とりわけか弱い女たちのことであった。

「あの〔神の〕愛」から「人間的なこと」へ、「太陽と他の星ぼし」から「苦しみ悩む人たち」へ、これら二つの語句の移り行きの中に、その二つの作品の世界の違いだけでなく、中世から近世へという、時代の移り行きも象徴的に言い表されていた。前者の舞台であった地獄も煉獄も天国も、そこに集う霊たちも、地獄の悪魔や怪物も、天国の聖者や天使たちも、また神学や自然学や天文学の該博な知識と深遠な議論も、古今東西の名高い歴史や物語も、後者ではまず登場しない。登場したとしても、事件や話の枠組みか背景、小道具か味付けとしてであり、でなければからかいか愚弄の対象としてである。

その例には全編事欠かないゆえ、一つを引くだけで十分であろう。シェーナの市民ティンゴッチォは、死後親友メウッチォの枕元に現れ、「あの世の様子」を次のように語って、来世での罰を恐れて同じ罪を犯すことを我慢していたその友人を安心させてやる。彼が地獄の劫火の中で震えていると：

・側にいたのが、「どんな罪を犯したのかね」って聞いたんだよ。それで、「名付け子の母親と寝ただけど、あんまり寝すぎてくたばっちまったのさ」って言ったんだ。そしたらそいつ、あざ笑って、「アホ、馬鹿、心配するなって、ここじゃ名付け子の母親のことなんて問題にもならないよ！」だとさ。(VII.10.26-29)⁴⁾

かくして『デカメロン』では、舞台はあくまで現世この地上、時代はほとんど同時代かすぐ前の時代、登場するのは生身の男女、語られるのは「人間的なこと」、となった。

では、ボッカッチョにとって「人間的なこと *umana cosa*」とは何だったか。作者はそれを、ある日の前置きの部分で次のような喩え話で説明する。

一人のフィレンツェの男が、愛する妻に先立たれた哀しみに、「神への奉仕に一身を捧げん」と心に決めて俗世を捨て、幼い子を連れて山にこもる。何年かたち、物心ついて初めて町に下りてきたその息子はしかし、美しく着飾った女たちを目にすると、あれは「鶯鳥という悪いもの」だとの父親の説得にもかかわらず、何度も見せられたあの絵の「天使よりも美しい」鶯鳥がなぜ悪いものなのか、ぜひ一羽欲しいと言い出す。こうして父親は、「自然の方が知恵よりも強い」ことを悟るのであった。(IV.Intr.12-29)⁵⁾

とすれば、そこで人間「自然の法則」(41)と呼ばれている「人間的なこと」とは、ボッカッチョにとって何よりもまず物質的には肉体であり、精神的には情念であり、社会の定めや宗教の教えよりも強い自然としての人間の在り様、おそらくいつの世にも変わらぬありのままの人間の姿のことであった。だからといってしかし、理性や道徳や信仰が直ちに否定されるわけではもちろんない。気高い行いや純粋な愛や敬虔な心もまた、「人間的なこと」であることに変わりない。ただ、時代はまだ中世から近世への過渡期にあった。作者の筆は、多くの場合そうしたものの賛美よりも、当時の社会に支配的であって「人間的なこと」を抑圧し妨害しているもの、宗教や道徳、形式や権威、身分や家柄、金銭や暴力への攻撃と否定へと向かい、その種々相をごく分かりやすくまた過激な形で描き出すことになる。

そうした障害に抵抗し自己を主張しようとする人間の姿がみられるのは、何よりも愛においてであり、とりわけ冒頭の序にも述べられてあったごとく、束縛され抑圧されてきた女たちのやむにやまれぬ恋においてであった。たとえば、学問することしかせぬ裁判官の夫を捨てて海賊のものとなった若く美しい妻は、取り戻しに来

たかつての夫に、「私の名誉についてはなんとも思いません。・・もし私が今死に値する罪を犯していますなら、いつかは痛烈な一撃をくらうでしょう。でも私のことは心配しないで下さい」(II.10.37)と宣告する。あるいは、夫の長い留守中、騎士ツイマの熱心な求愛を受け入れるときのミラノ市長夫人の言い分は、「自分ができるときに、なぜこの好機を捕まえないのか分からない。・・たとえあとで人に知られても、して後悔するほうが、しないで後悔するよりもいい」(III.5.30)というものであった。つまり「女が男と親しい関係になるのは自然の罪」(III.7.45)なのである。あるいは、年寄りの夫に満たされぬ体を持って余す妻が転がり込んできたチャンスを楽しむのは「運命の恩恵」(VII.9)であり、「自然の掟」に反する夫をもったがためもだえる妻が、それゆえの背信をとがめられて反駁に持ち出すのは、「女としての自然の欲求」(V.10)である。

神に仕える者たちも「人間」であることに変わらない。愛を告白されて仰天している人妻を、トスカーナの修道院長は、「このために聖性が減ることはありません。といいますのも、聖性は魂の中に宿っており、私が奥様に求めますのは、肉体の罪なのですから」(III.8.25)といて説き伏せる。修道女も「肉の刺激から身を守るのは不可能」(IX.2.18)であり、「男はどんは獣か試してみたいという欲望」(III.1.29)から自由ではない。

身分や家柄も、人間「自然の法則」に反するものの一つである。貴族でないが故に「生まれの卑しい」小姓グィスカルドとの愛を父のサレルノ君主タンクレーディから禁じられたその娘ギズムンダは、自分が恋の過ちを犯したのは「自然の罪」だからしかたないが、あの若者を選んだのは、彼が「生まれ」や「財産」の貴族ではないにしても「徳と行い」の貴族だからだと言いつ返し、父から贈られたその恋人の心臓に毒を注いであおる(IV.1)。修道院長に変装してローマに旅するイギリスの王女が見染めたのは、道連れとなった商人の手代アレッサンドロであり、到着するや彼との結婚を教皇に願い出る(II.3)。

人種や国籍や宗教の違いもまた、往々にして「人間的なこと」の障害となる。後にみるが、イスラム教徒もユダヤ教徒も「異教徒 pagano」と呼ばれることはないし、そうした違いを越えた恋や友情の数々の例が描き出される。何国人であれ、もったいぶった人物や尊大な権威者を愚弄し、間抜けな人間や滑稽な連中をからかっ

でも、また粗野な人物のことを「野生人 salvatico」(IV.2)とは言っても、「バルバロ barbaro」(野蛮人)なる言葉はいかなる人種・民族・人間に対しても投げつけていない。

かといって、さきに引用したごときあるいは俗に知られるごとき、いわゆる艶笑譚あるいは好色もののみがこの書の中心をなすのでは決してない。最終日第十日は、「愛かほかのことで自由に、あるいは立派に何かを成した者について」をテーマとし、心の寛さと物に対する惜しみなきの話を集めてバランスが取られている。モーデナの騎士ジェンティーレも(X.4)、ウーディネの男爵アンサルドも(X.5)、ついに恋する夫人を自由にできる機会をものにしながら、結局は手も触れずにその夫のもとに送り返す。ナーポリの王アンジューのカルロは、さる家来の美しい娘たちへの老いらくの恋を自制して、彼女たちを立派に嫁がせてやる(X.6)。

『デカメロン』の主たる性格の一つが、上のみたごときその現世主義と人間主義にあったとすれば、もう一つは、その内容の多様性と作者の視点の相対性であろう。

ちなみに、作者はこの作品の構成と意図を次のように語って、冒頭に引用した「序」を結ぶ。七人の女性と三人の若者の一団によって十日の間に語られた百の話、寓話や喩え話や本当にあった話の中には：

昔の時代や今の時代に起こった、楽しい恋や苦しい恋の様々な形、その他運命のいろいろな出来事がみられるでしょう。これをお読みになる御婦人方は、そこに示されている、慰めとなる事どもの楽しみと同じく、お役に立つ忠告を引き出すことができますし、また避くべきことと同様に、従うべきことをお知りになることができるであります。(Pr.13-14)

すなわち、形式的にも内容的にも題材の上でも中身の点でも、なるべく様々なものを取り上げるので、好きなようにお取りになるがいい、と。

事実、その登場人物と出来事は、あらゆる点で多様である。『神曲』もまたそこに登場する人々の数において劣らぬが、その大部分が古今の王侯君主や貴族、聖者や学者、いわゆる貴顕の士であったのに対して、『デカメロン』では、以下いちいち例を引くことは省略するが、それらかつての時代の主人公たちよりは、新たな時

代の商人と一般市民、いわゆる庶民が中心となる。しかも、騎士や貴族が登場するときも、語られるのはその武勲や学識ではなく恋やもめごとであり、聖職者たちは、その信仰や高德ではなくもっぱらその偽善や腐敗堕落ぶりである。商人や市民も、その物欲や色欲、たばかりやへま、無知や盲信などがもっぱら風刺と笑いの対象となる点は同じだとはいえ、その仕事と生活、行動とメンタリティーを携えて、新たな時代の主人公として登場する。それこそが『デカメロン』の新しさであった。

さらに、注目すべきはその人間関係の相対性である。庶民はいつも貴族や騎士や聖職者に屈服しているわけではなく、しばしば主人たちをからかい、鼻をあかし、勝ちを占める。王女が従者に恋をし、高貴の青年が貧しい娘を妻に選ぶ。僧侶たちは多くの場合愚弄の対象だが、時にその立場や時に民衆の愚かさを利用して彼らも世俗的な欲望を満たす。恋の沙汰や駆け引きにおいても、男と女、夫と妻が互いに手練手管を弄し、騙し合う。かといって全てが淫蕩で滑稽なのではなく、純愛・貞節・悲恋にも事欠かない。つまり、その登場人物の身分・階層・職業・年齢・性別・文化・宗教・国籍・倫理・思想・知性において多様であるばかりではなく、主従・聖俗・貴賤・男女・夫婦・親子といったその人間関係において相対的であり、その判断の基準となるのは常に、どちらの行為と言い分がより「人間的」かなのである。

ちなみに第一日第一話は、「生きているあいだ神様に対して悪の限りを尽くした」古今未曾有の極悪人だったが、死に際に「もう一つやったとて、大して変わりはあるまい」と、偽りの懺悔をして僧を騙し、死後聖者として祀られたパリのイタリア人公証人聖チャペレットの話(I.1)であり、最後の第十日第十話は、サルツォの侯爵グアルティエーリに望まれてその妻となったが、子供を取り上げられたり、下着一枚で追い出されたりと、幾多の過酷な試練に耐えて夫の信頼と愛情を勝ち得た、田舎の貧乏な羊番の娘の出だが、「真の心の貴婦人」グリセルダの話(X.10)である。この、悪の権化から貞女の鑑に至る、悪徳から高德への百の話の中に、作者はその題材と内容の様々な色合いを慎重に配したのであった。

その意味で、『神曲』が、構造的にも思想的にも空間的にも時間的にも、キリスト教文明を中心として正確な設計図の下に組み立てられた堅固な建築物、いわゆる中世ゴシックの荘厳な大伽藍であったとすれば、『デカメロン』は、種々様々な色の糸で織られた華やかなアラベスク模様の織物か、その大伽藍の色つきタイルのモ

ザイクの床である。あるいは、デ・サンクティス以来すでにあらゆるところで解説されていることながら、前者が天上と来世の曼陀羅であり、その名のとおり神を讃える「神聖喜劇」であったとすれば、後者は、地上と現世の万華鏡であり、人間を讃える「人間喜劇」つまり「人曲」であった。

かくして天・人・地というダンテの壮大な三界構造の宇宙は消え失せ、地球は著しく平板なものと化した。前者に劣らぬ豊かな世界がその上に新たに切り拓かれることとなった。そして様々な人間が登場し、種々な事件の起こる舞台となるその地上の土地も、これからみてゆくごとく、多様であることはいうまでもない。作者縁の地フィレンツェやナポリが中心となるのは当然としても、イタリア全土の主要な都市、ヨーロッパはパリ、ロンドンを中心としてスペイン、アイルランドからギリシャまで、そして地中海全域、さらにペルシャ、インド、中国と東の極にまで及ぶ。つまり作者は、登場人物や事件の種類や要素や性格に様々なヴァリエーションをもたせたように、その舞台をも、当時知られていた地理世界にできるかぎりまんべんなく分布させたとみてよい。

とすると我々の興味は、神から人、天上から地上、来世から現世、あるいは王侯・騎士から商人・市民へと、少なくとも素材と形式の上では起こっているこのパラダイムの転換のなかで、地球像（コスモグラフィ）の、そして東方像（オリエント）の変化が起こっているか否かであり、かつまたかつての東方像を構成していた、たとえばプレスビテル・ヨハンネスやゴグ・マゴグや山の老人といった、項目の種類とその組み合わせに変化が起こっているかである。そして、もし起こっているならば、すでにみたごときその現世主義と人間主義、多様性と相対性のもとで、その世界観（コスモロジー）と東方観（オリエンタリズム）はいかなる新しい性格をもつに至っているか、すなわち、ボッカッチョのいう「人間的な」世界像とはどういうものであるのか、かつての「驚異と幻想」「怪奇と野蛮」の東方はその中でよく「現世的・人間的」なものとなっているか、つまりその「多様な」現実と人間が描かれ、しかもそれは、肯定するにせよ否定するにせよ一方的に判定されることなく、西方とよく「相対化」されているか、である。さらにまた、自・他、異・同の視点からすれば、作者ボッカッチョにとっては何が「自なるもの」であり「異なるもの」であり、他は自から「異化」されているのかそれとも自に「同化」されているのか、

である。

ではまず、世界はいかに登場するであろうか。

2 東方

といっても、『デカメロン』の中に全体的な世界像が提示されているわけでは全くない。どころか、地球の形状や地理に言及した箇所はどこにもない。

詩人であり政治家であるとともに哲学者であり自然学者でもあったダンテにとっては、神と人間の形而上の在り様のみならず、その棲み家たる宇宙と地球の形而下の存在も学の対象であり、ましてや宇宙そのものを舞台とする『神曲』においては、その構造の解明は必要欠くべからざる前提であった。そして世界は、物理的のみならず文化的にも、エルサレムを中心とするキリスト教世界とそれを取り巻くイスラム世界、さらにその外に広がる未開野蛮の世界という、立体的な構造を与えられ、その中で東方アジアも、ユーラシア大陸の東限をなす最果ての地として明確に位置づけられていることは前にみた。⁶⁾

これに対して、豊かな詩的才能に恵まれていたとはいえ、正規の教育も受けず、父を継いで商人となるための見習いと、修行先ナポリとその宮廷での甘い生活に人生の前半を過ごしたボッカッチョには、深遠な哲学的思索や韜晦な神学的論議、ましてや天体の運動や地球の形状についての考察は肌に合わなかった。あるいは少なくとも、この世にうごめく人々のありのままを綴るという、「人間的なこと」をテーマとするその作品にとっては、ダンテの文学にとってほども必要なものではなかった。⁷⁾

だからといって、各話の舞台がフィレンツェあるいはイタリアにのみ限られるわけではなく、ヨーロッパ諸国からいわゆるオリエントまで、「世界のいろいろな所をめぐる」(IV.7.5)形に広く分布させられていることは、この作品の多様性・相対性のところすでに述べたが、事実登場する異国、とりわけオリエントは『神曲』以上に多い。では東方は、実際にどのように登場するであろうか。

2.1 遠いオリエント

まずインドは、例によって地球上の最も遠い所、「世界の果て」である。例えば、

豚泥棒をめぐる、フィレンツェの絵かきカランドリーノとブッフアルマッコのやりとりの中で：

もちろんお前の豚を盗みに、誰もインドからやってきたわけじゃないさ。そいつらの誰かはお前の家の近くの者だったに違いないよ。(VIII.6.32)

このインドは、どこか「とても遠い所」を意味する当時のトポス（常套句）であり⁸⁾、ダンテにおいてのようにはっきりとユーラシア大陸の東限をなす地理上の国では全くないし、『神曲』に顕著だった気象的異常性の意味も、この場合は込められていない。

また、後にみる修道士チポッラの従者グッチョの不潔さを表すのに用いられている、「タルタルかインドの織物さえとても及ばぬほど沢山の染みや色の付いた」上着(VI.10.23)といった用法も、『デカメロン』ではふんだんにみられる誇張のための修辭的用法の一つであって、地理的な意味はない。またこれは、『神曲』から直接採られた表現の一つであることが知られるが、「タルタル」がこの地球のどの地域にあるのか、作者が明確な知識とイメージをもっていただかどうか疑わしい。⁹⁾

アジアあるいは遠いオリエントもしかし、十四世紀も半ばともなると、こうした既成の観念や、遙かな昔から多くの古典や権威によって語り伝えられてきた知識や伝説とは別に、この「タルタルかインドの織物」がいわゆるペルシャ絨毯のことを指すように、当時の盛んな交易と商人の往来によってもたらされる様々な情報や物資をとおして、着実にその姿を現しつつあった。しかも、その商の世界こそが作者の生きていた環境であった。

十三世紀以後、フランドル産毛織り物の輸入加工販売を中心とするフィレンツェ商工業は十四世紀に入ってさらに発展し、またとりわけ教皇庁の御用をあずかったその金融業は、ヨーロッパ諸侯の金融をほぼ独占して、イタリア各地をはじめパリ・ロンドンなどヨーロッパ主要都市に支店網を築き、オリエントにもその市場を広げつつあった。その上、そのフィレンツェの当時最も有力な銀行の一つバルディ商会の駐在員であった父の関係からボッカッチョが青春期を過ごしたナポリは、ビザンチン帝国ならびにアレクサンドリアを中心とするイスラム世界との東方貿易の一大拠点であり、また北欧からやってきたノルマン、神聖ローマ帝国のフェデリーコ、そしてフランスのアンジューへと渡ったその宮廷も町も国際色豊かであった¹⁰⁾。こうした歴史的背景が『デカメロン』の世界と舞台であり、その文学的新しさ

と成功の要因であり、「近世市民社会の叙事詩」あるいは「商人の叙事詩」と称される所以であることは、あらゆるところで指摘されるとおりである。

こうして始まった西方人の地理的地平の拡大は、ダンテに半世紀遅れて登場し、その商の世界の人であり、ましてやあの世ではなくこの世を相手とするボッカッチョの作品の舞台をも拡大させ豊かにしたことは言うまでもない。その代表的な例が、ダンテでは無視されていたカタイの登場であろう。

「寛大」をテーマとする十日目の第三話、ナタンとミトリダネスの鷹揚さ比べの話は次のように始まる：

いく人かのジェノヴァ人や、かの地にいたことのある他の人々の言葉に信をおくことができるとしますれば、むかしカッタリオの地方に、ナタンという名の、高貴の身分で比べようもないほどの金持ちがおりました。(X.3.4)¹¹⁾

もっとも、この「カッタリオ」をそのまま中国と想像して読み進めていくと、どこかチグハグであることに気付かされる。まず、そこに住むのは「ナタン」という人物であり、ここでは大金持ちに変えられてはいるが、いうまでもなく旧約聖書に登場するダビデの子にして予言者であった¹²⁾。しかも彼は：

西方から東方、あるいは東方から西方へと往かねばならぬ者が皆、ほとんどどうしても通ることになる街道の近くに屋敷を構えておりました。(5)^{12-1)*}

とするとこの地は、地球上の最も遠いところ「東の果て」ではなく、どうやら人間と物資が行き来する東西の交通の要衝と覚しきところのようである。東方にカタイという国の存在することは、十四世紀も半ばとなると西方でももはや確実に知られるに至っていたが、ただインドとカタイの地理的關係、そのどちらがより東にあるかは一般にはまだはっきりとは認識されていず、ボッカッチョにとっても無理ないことであった。¹³⁾

とまれ、ナタンは高貴の身分の大富豪であり：

たくさんの職人を有していて、わずかの間に、今まで見たこともないようなこの上なく美しく大きく、また豪華な宮殿の一つを建てさせ、やんごとなき人々を招いてもてなすのに必要なあらゆるものを、とてもうまく備え付けました。また彼は、素晴らしい大家

族を有しており、往来する者は誰であれ飲んで楽しく迎え入れ、もてなしました。そして、この褒むべき行いをずっと続けたので、東方のみならず、ほとんど西方全体がその名声を知っておりました。(5-6)¹³⁻¹⁾*

もしこの「ナタン」を「クビライ」と読み替えることができるとすれば、「多くの職人」、「わずかな間」に建てた「豪華極まりない宮殿」、「大家族」、客人に対する惜しみない「もてなし」、「東西に知られたその名」と、まさしくマルコ - - ここでは「ジェノヴァ人」と変えられてしまっているが -- がその旅行記の中で描いた、新造された広大な都と豪華な宮廷（大都）、信じられぬ莫大な富、旅人や商人に対する分け隔てのないもてなし、施し物の習慣、貢ぎ物に倍する賜物等々の、かの元朝の「グラン・カン」（大汗）についての数々の記事を思い起こさせ、この話の舞台にカタイを選んだのもそれがためだったのではあるまいかと想像させる。

14)

また細部では、ナタンが頭に「ターバン」を巻き、相手の若者ミトリダネスが「弓と刀」で武装したりしている(25)ことから、ペルシャあるいはアラビアを連想させるにしても、話全体の雰囲気と事件の成り行き、それに主人公の、富豪の老人でありながら、毎日「質素な身なりで一人で散歩する」(12)といった生活態度、「自然の流れにしたがえば、人間とこの世のあらゆる物と同じように、私の命ももう僅かな時間しか残っていないのです」(36)といった無常感、それ故お役に立つなら「自分の命でも飲んで進呈いたしましょう」(37)といった生命観は、それよりも東の仏教か儒教の世界、インドか中国を想起させるに充分である。したがってこれは、ペルシャかアラビアあるいはトルコの話をもとにその舞台をカタイに変えたというより、インドか中国の話をもとにしてその人物をナタンに変えたとみる方が、有り得るのであろう。¹⁵⁾

ナタンのこの話が、まだなにか寓話的・教訓的で、その舞台たるカタイもどこか遠いおとぎの国のようであり、君主の名前や広場や通りの名をはっきりと出して時代や場所が特定される他の話と比べて、時代的にも空間的にも具体性を欠いているのに対して、次の話は、遠い「未知の国々」とか「全世界」というものが、新興階級たる都市国家の市民たち、当時の庶民にとってはどのような関心の対象であったか、つまり「現世的」「人間的」な異国像とはどのようなものになりつつあったかを素直に語ってくれる。

悪知恵にたけたフィレンツェの貧乏絵かきブルーノとブッフアルマッコの二人

組は、ボローニャで医学博士の学位はとったがお人好しで騙されやすいシモーネ先生をからかうために、「略奪に行く」（女たちをものにする）ことに誘うのであるが、まずその団体の集まりの様は：

私たちが食事をする広間の周囲の緞帳や、王宮のような御馳走の並んだ食卓、この集まりに出席する銘々の好みのままに上品で美しい男女の給仕たちの数、私たちが飲み食いに用いる容器〔金盃〕、壺〔尿瓶〕、杯その他金銀の器、こうしたものを目にするのは驚嘆すべきことです。(VIII.9.20)

つまり、昔から異国物の定型であった「驚くべきことども」を語る「驚異譚」として始まる。したがってそこでは、無数の楽器の甘い調べやメロディーたっぷりの歌が、どのようにまたどれほど聞かれるか、「とてもお話することはできません」し、その食事にどれほどの蠟燭が灯され、どれほどのお菓子が消費されるか、高価な葡萄酒が何本飲まれるか、「口にすることもできません」(21)と、お馴染みの言い草となる。

しかも、そこでの「何にも勝る娛しみ」となれば、いうまでもなく「美女」であり、「男が望みさえすれば、世界中から直ちにそこにやって来るのです」⁽²³⁾と、ここで舞台は一気に「世界」に広がる。驚異譚でしかも女とくれば、すぐに連想されるのはエキゾチックな異国、とりわけ古来から官能と淫蕩の巷とされてきたオリエントであろう。どんな「美女」たちかというと：

そこでは、バルバニッキの女、バスキの女王、スルタンの妻、オズベックの皇后、ノルウェーカのチャンチャンフェーラ、ベルリンゾーネのセミスタンテ、ナルシアのスカルペデラをご覧になるでしょう。・・さらに、世界の女王たちが全ております、プレスト・ジョヴァンニのスキンキムツラまでですぞ！(23-24)

これらの名前のうち、女たちの方は口から出まかせのふざけたものだが、地名の方はある程度現実を踏まえている。まず、「バルバニッキ」はすぐ「バルバロ」や「バルバリコ」を思い起こさす。「バスク」は後出の「ベルリンゾーネ」とともに、

当時の寓話でヨーロッパ内の僻遠の地の代名詞だった。「スルタン」は言うまでもない。「オズベック」は、第二日第七話アラティエルの冒険にも「トルコ人の王」として登場するキプチャク汗国のウズベク・ハーンを指す¹⁶⁾。「ノルヴェーカ」はノルヴェージア、「ナルシャ」はペルシャのもじりであろうか。そして最後に挙げられるのが、中世のヨーロッパで、東方にあって広大な領土と莫大な富を有すると伝えられたキリスト教の司祭にして王「プレスト・ジョヴァンニ」である。この人物は当時まだ、インドかアフリカのエチオピアか、とにかく地球上のどこかに存在すると信じられていたが¹⁷⁾、ここではしかし、彼にまつわるフィレンツェの庶民の関心は、かつての伝説においてのごとくその富や権力ではなく、王妃「スキンキムツラ」の方であり、しかも好色な欲望の対象としてである。もっとも、いくら世俗化して王と呼ばれているとはいえ、一応司祭であってみれば正式の妃がいるわけではないのだが。

で、そのうちの気に入った美女を連れて自室にしけ込むのだが、その部屋というのが、「まるで天国のように」美しく、医者シモーネ先生が「クミンを潰すときの、香料の瓶のある薬部屋におとらぬいいにおいがする」。またそのベッドは、「ヴェネツィアのドージェのよりも」美しい(25)。そこで、ブルーノとブッフアルマッコはそれぞれ、「世界で最も美しい二人の女」である「イギリスの女王」と「フランスの女王」を選ぶ(27)。

ところが次の時「イギリスの女王が少し嫌になった」ブルーノが呼んだのは、「アルタリージのグラン・カンのグメドラ」(35)であり、「グメドラ」とは、その「グラン・カーネの言葉で我々の皇后」を意味する(39)。「グラン・カーネ」は、前出の伝説の「プレスト・ジョヴァンニ」に代わって、実在する東方の大君主を指す名称として広く知られ始めていた。とすれば、「グメドラ」はシモーネ先生をからかうためのふざけた造語だとしても、「アルタリージ」には、彼ら西方人がモンゴル人をさして呼ぶ「タルタリ」、あるいはその始祖チンギス・カーンとモンゴル帝国の故地「アルタイ」が連想される。¹⁸⁾

こうしてここに持ち出されている国や地は、自分たちの生活や感覚から絶対的に切り離された、ダンテにおいてのごとくまるで天国か地獄のような異国ではない。遠くにあってまだまだ未知で想像の対象ではあっても、自分たちと同じような肉体と精神をもった同じような人間の住むはずの、手の届く身近な隣国である。そして

それに対する関心も、かつてのごとくその驚異と幻想や怪奇と野蛮ではなく、女性というごく「現世的・人間的」なものであり、しかもその王や女王といった存在もからかいの的である。

こうした東方の変容、その世俗化・戯画化のもう一つの典型的な例を、一昔前まではその欠くべからざる一項目であった「山の老人」の粉薬の場合にもみることができる。マルコにも紹介された、ペルシャの高山に隠れ棲んで各地に刺客を放つというその老人と、刺客を養成するのに用いられるという麻薬ハッシッシは、『デカメロン』では、先ほどの「プレスト・ジョヴァンニ」と同じようにその神秘性や幻想性を剥奪されて、フィレンツェのさる「高德の」修道院長によって、人妻を娯しむためその哀れな夫フェロンドを眠らせて「煉獄に送り込む」のに用いられるのである。彼は：

東方の地でさる大君からもらった驚くべき効き目をもった粉薬を探し出し、（その薬は、かの大君の話によると、「山の老人」が誰かを眠ったままその天国に送り込んだり連れ出したりするときにも使うのだそう・・・ですが）、それを、三日間眠らせるに十分なだけの量をとって、まだ澄んでいない一杯の葡萄酒の中に入れ、自分の小坊で、フェロンドに気付かれないように飲ませました。(III.8.31)¹⁹⁾

さて、西方と東方、その「人間同士」をつなぐのは、もちろんそうした知識や情報だけでなかった。庶民にとっても、金持ちや貴顕の士にとってはなおさら、ますます発展する東方交易によってそこからもたらされる産物であった。東洋からの珍しい品々は、商の世界の人でもあった作者によって、現世主義のもとに人間のありのままを描かんとしたこの書では、当然ながら、ダンテにおいてのごとく物欲の対象として非難の口実となることはなく、多くの場合、現世の生活を楽しく豊かにするものとして、あるいは時として庶民のささやかな欲望をからかう種として持ち出されるだけである。つまり、物欲もまた「人間的なこと」なのであった。

まず、東方の代表的な特産品だった絹は、もはや西方でも生産が開始されたこともあって、必需品のごとくあらゆる所で登場する。しかも絹は、高価な衣装に使われたり貴重品として蔵されたりするだけではなく、当時の社会と人々の生活での別の関わり方を窺わせている。たとえば、ユダヤ人の友人アブラハムにキリスト教へ

の改宗を勧めるジャノット・ディ・チヴィーニは「(高価な絹)織物の取り引きを手広く営む」パリの大商人であるし(I.2)、トゥニジアの海岸に流れ着いたシチーリアの女ゴスタンツァは、そのサラセン婦人の家で、「絹やしゅろの皮でいろいろな物を作って」暮らす女たちと生活を共にする(V.2)。

絹とならぶ東方の産物は香料だった。この物語を語る十人の紳士淑女が起居を共にするフィレンツェ郊外の瀟洒な別荘の庭は：

・ ・ すっかり咲きそろった花は庭中に強い芳香をまき散らしていましたので、庭に香る多くの他のもののおいと入り交じって、東方に産したあらゆる種類の香料の樹に取り囲まれているように思えました。(III.Intr.6)

香料が芳香剤として貴顕の士のどれほど好まれたかがここからも分かるが、薬品としても用いられたことが、序幕の著名なペストの描写の所から知られる。生き残った者のうち：

・ ・ ある者は花を、ある者は香り草を、ある者は様々な種類の香料を手にして歩き、それを何度も鼻に当て、そのにおいで脳に活力を与えるのが最良だと考えて・ ・ おりました。(I.Intr.24)

ついでながら、そのペストもまた、「数年前東方の地に始まった」(I.Intr.8)ものであった²⁰⁾。しかしだからといって作者は、それが故に東方をアンチクリストやゴグ・マゴグに結び付けることはしていない。そのペストにしても、その原因を一応は「天体の影響」か人間の過ちや不正に対する「神の怒り」(8,25)に求め、摂理だとする。しかしそれに続くのは、人間の罪の弾劾や神の怒りを鎮めるための祈りへの呼びかけではなく、ペストの病状と社会の混乱の冷静で客観的な描写であり、むしろそんな時代にこそ「理性」をもって「正しく」かつ「楽しく暮らす」(94)ことが大切だと説いて、この作品の枠の舞台となる前述の別荘を設定する。そしてそこで語られるのは、すでにみてきたごとく、事実この世を楽しく暮らしている人々の草々であった。万物を創造し、この世を覆い包み込んでいるのは神であり、その手

が世界の隅々、我々の一人一人にまで及んでいるにしても、それは視えざるものであり、人間の日々の行いや言葉の動因は人間それ自体、その精神と肉体でありあるいは偶然であって、もはや摂理ではないのである。

宝石についても同様である。たいていは富の象徴、装飾品としてその美しさと価値が素直に肯定され、それにまつわる仕事（鑑定家 II.4）が登場するし、また時に、聖俗とわぬ人間の色ぼけ、欲ぼけをからかう小道具として利用される。

ナポリで女にひっかかって一文無しになったペルージャの馬の仲買人アンドレウッチォは墓泥棒の仲間に入るのだが、その最初の仕事というのは、その日埋葬されたナポリの枢機卿の指から、「金貨五百フィオリン以上の値打ちのあるルビー」の指輪を盗むことだった(II.5.63)。あるいは、また例のフィレンツェの二人組ともう一人の友人が、やはりお人好しの絵かきカランドリーノを騙す口実に使うのは、それを身につけていれば誰にも姿を見られないという石「エリトローピア」を見つけに行こうという誘いであった(VIII.3)。

以上のごとく、まだ寓話的・伝説的な古いオリエント像を土台としながらも、東方は、着実にもたらされる交易品と情報をとおしてかき立てられる新たな身近な関心の対象となりつつあった。つまり、遠くにある相変わらず未知と空想の地でありながらも、古代・中世においてのごとく絶対的に分け隔てられた異界、「世界の最果て」「野蛮と怪奇」「恐怖と憎悪」の地、あるいは「驚異と富」「憧憬と賛嘆」の郷ではなく、王侯や騎士にとっての遠征と冒険、聖職者にとっての布教と探求の対象のみならず、商人にとっての豊かな物資の産地であり、交易の相手であり、庶民にとってのささやかな現世的欲望、物欲や色欲、多少の知的好奇心とからかい、憧れと蔑視の対象となりつつあった。すなわち、『デカメロン』では、オリエント像も着実に「現世的」「人間的」になると同時に、一方ではもはやただ一方的に驚嘆され幻想されることのない代わりに、風刺されたり愚弄されたりすることを避けることはできなかった。

そうした新たな東西の関係、すなわちまだ不正確で混乱した地理、そこへの商人や聖職者の往来、彼らによってもたらされるモノと情報、社会階層による係わり合い方の違い、その落差を利用した善良だが無知な庶民にたいするからかいと笑い、そして何よりもオリエントの戯画化等々、そうした新旧の東方像の集大成を、『デカメロン』百話のうちでも最も著名なチポツァ修道士の話の中に楽しむことができ

る。そこにはまた古今の様々な東方もの、すなわち古代から中世へと途切れることなく伝承されてきたアレクサンドロス伝説、十字軍時代の聖地巡礼案内、伝道修道士たちのモンゴル記、そして商人たちの東方旅行記が下敷きとされているのだが、その代表的なものの一つだったマルコ・ポーロの書もまた大きな影を落としているのが確実に認められる。²¹⁾

「学は何一つなかったが、話上手で機転のきく」(VI.10.7)聖アントーニオ教団の修道士チポツラは、オウムの尻尾の羽を「かつて自分が海の彼方の聖地から持ち帰った・・天使ガブリエッロの羽の一枚」(11)と偽って、フィレンツェ郊外チェルタルドの善男善女からしこたまお布施を稼いでやろうとの計略をたてるのだが、そんなふざけた話を容易に信じ込ませることができたのも：

エジプトの珍しい品々は、後には大量に流れ込んでイタリア全土に損害を与えましたが、トスカーナにはまだ少ししかやって来ていなかったのも、この辺の住人にはほとんど何も知られていなかった、(27-28)

からであった。ここで「エジプト」とは、当時のイタリア諸都市の重要な交易相手マムルーク朝とその中心地アレキサンドリア、あるいは一般にオリエント全体であり、当時のフィレンツェあるいはイタリア全体の商業的発展と東方からの商品の流入がどれほど急速だったかが窺える。

ところがその羽は、二人の悪戯者によって炭と入れ換えられており、いよいよ御開帳に及ぶ段となって箱を開いてそれに気づいた修道士は、顔色一つ変えずにその場を取り繕い――その機転と堂々たる弁舌の才がこの話の主テーマとなっているのだが――その「聖遺物」を手に入れたいきさつを次のように切り出す：

紳士淑女の皆さん、いと若かりし頃私は、上司から日の現れるところに派遣され、ポルチェッラーナの認可証を手に入れるべく努めるようはっきりと申し渡されました。(37)²¹⁻¹⁾*

まず、「日の現れるところ」ということであれば、どこでもいいわけだがまずは「日の昇る地」すなわち東方がすぐ連想されよう。かつて「上司」すなわち教皇庁

や教団から東方に派遣されたのは全て、かのカルピニやルブルクがそうであったようにフランチェスコ会やドメニコ会の修道士たちであった。その名目はもちろん布教だったが、実際は情報収集から軍事偵察まで諸々の役目を託されていた²²⁾。チポッラ修道士の場合は、「ポルチェッラーナの認可証を手に入れる」こととある。つまり、「ポルチェッラーナ il Porcellana」という国（あるいは地）の布教（あるいは通商）の「認可証 i privilegi」の獲得である。とすると、ここでは東方が「ポルチェッラーナ」と呼ばれていることになる。ポルチェッラーナとはコヤス貝、あるいは一般にタカラガイ科の貝のことであり、東方諸地、特に東南アジアからインド洋そしてアフリカ沿岸諸国では広くコヤス貝が貨幣として用いられていることは、商の世界ではよく知られていた。マルコもまた、そのことを記している。²³⁾

しかしこの「ポルチェッラーナ」には、多義的で曖昧な表現や掛け言葉の多用で知られる『デカメロン』では、もう一つの新しい意味が込められている。すなわち「瓷器」のことであり、海上ルートによる東方交易では十三世紀半ば頃から、かつての絹や香辛料に加えて中国の陶磁器が主要品目として登場し始めていた。ヨーロッパにはまだ「大量に流れ込んで」はいなかったが、少なくともその素晴らしさの噂は伝わっていたであろう。しかもその、硬く引き締まり白く輝く「瓷器」は、古くからどこにでもある軟らかい土色の「陶器」と違って、西方人にとってはかつての絹と同じく、その後も数百年にわたって知られることのないまさしく東方の「特権 privilegio」であり、したがってその「獲得」は莫大な利益となることを、元バルディ商会社員ボッカッチョは正しく知っていたに違いない²⁴⁾。だからチポッラ修道士は続けて言う：

それ [ポルチェッラーナの認可書] は、たとえ印を押すのは全くタダにしても、私どもよりずっと他の人たちに利益になるのです。(37)²⁴⁻¹⁾*

その中国瓷器のことをヨーロッパに最も早く紹介したのは、マルコ・ポーロの書であった。帰路の出帆地ザイトン（泉州）の記事が名高い：

この地方ではティウンジュという名の町で、とても言い表すことができないような世界でも最も美しい大小の瓷器の碗が作られる。またこの町以外の他のどこでも作られない。そしてそこから世界中に持ち運ばれる。またそこにはとても大きな市があり、一ヴェネツィア・グロッソで、えもいえぬほど綺麗なものが三つ得られるだろう。²⁵⁾

しかもこの記事は、‘porcellana’の語が「瓷器」の意味で使われている少なくとも今に残る最初の文献であることが知られるが、とすると『デカメロン』のこの箇所も、それに続く最も早い用例の一つであり、しかも、二十世紀初頭に至るまで続くことになるその「特権の獲得」にまつわる歴史を予言するものとなっている。²⁶⁾

さて、そこでチポツラ修道士は、「ヴィネーシアから出発し」、「ボルゴ・デ・グレーチ」（コンスタンティノープル）、「ガルボ王国」（モロッコ北部）、「バルダッカ」（バグダード）、「パリオーネ」、「サルデーニア」、「ブラッチョ・ディ・サン・ジョルジョ」（ボスポラス海峡）を通過してゆく(38-39)。これらの地名は全て、当時のフィレンツェに実在した道路や街区の名で、それを東から西へと「旅する」順に並べられていることが確かめられているが、同時に括弧内の意味が掛けられていたことも疑いない。「ヴェネツィアから出発」したとは、直接マルコを思いますが、同地は当時聖地への巡礼のもっとも著名な出航地であった。

さらにそこから、「たぐさんの人々の住む人口の多い国々であるトゥルツフィアとブツフィアを通り、メンゾーニアの地」にやってくる(39)。これら「詐欺」「愚弄」「虚言」の国々とは、そこには「我々のや他の教団の修道僧たちがとても沢山いて」(39)、互いに角突き合せているところからすると、当時の宗教界一般をあてこすったものようだが、マルコも、その書に綴ったことが事実とはとても信じてももらえず、「嘘つきマルコ」と後ろ指さされていたことが思い出される。それらの国ではまた、「お金を鑄造せぬまま使っている」(39)とあるのは、「贖宥を乱発すること、あるいは一般に「饒舌にふける」ことを意味するとのことだが²⁸⁾、これにルブルクやマルコによってヨーロッパに初めて紹介された、いくらでも印刷できる「錬金術師」クビライのお金「紙幣」のことが敷かれていると取るのは確実であろう。²⁹⁾

次いで「アブルツツィの地」、さらにそこから「毛虫の山」にやってくる(40)。この「毛虫」が桑の毛虫、つまり蚕を指すなら、かつては「セリカ」（絹）の地「セレス」として知られた中国への旅に言及したものとの有力な根拠となるが、「蚕」と解釈できる確証はない。しかし、ボッカッチョの頃にはもう、絹は「木の葉をすいて」得られるのではなく、何か虫によって作られるものであることは、広く知られるようになっていた。

さて、その「毛虫の山」では、水は全て「下の方に流れている」(41)ものだから、「その中に入ると」、あっという間に「インディア・パステイナカ」にまで着く(42)。この「パステイナカ」（サトウニンジン）とは、インドに産する胡椒に代表さ

れる香辛料のパロディーであろう。また「水」と「インド」の取り合わせとなると、すぐ思い出されるのはアレクサンドロス遠征であり、事実そこで「それを見たことのない人には信じられないでしょうが、剪定鎌が空飛ぶのを見たのです」と、古来その遠征譚に語り伝えられてきた数々の「インドの驚異」が、「空飛ぶ剪定鎌」（要するに鳥）に代表されてからかわれている³⁰⁾。しかも御丁寧に、「身にまどっている衣にかけて誓う」とか、「（マーズ・デル・サッジョよ、）どうか嘘を言わせないで下さい」と、お決まりの文句で補強する(42)。この「マーズ・デル・サッジョ」とは、当時実在したフィレンツェの有名な諧謔家の仲買人とのことだが³¹⁾、この話ではそこで出会った「胡桃を踏み潰して、その殻を小売りしていた大商人」とのことと、怪しげな商品を東方産と称して売っていた交易商人たちを茶化したものであろうが、その「最大の商人」となれば、真っ先に思い浮かべられるのがマルコ・ポーロであろう。

とまれ、求めていたものが見つからなかったものだから、インダス川まで至りながらそれ以上の遠征は諦めてインド洋沿岸ぞいに戻ってきたかのマケドニアの王と同じように、「そこから先は水路」だったので引き返し、「年のうち夏は冷たいパンが四デナリするが、暑さはタダというかの聖地」に着く(43)と³²⁾、ここに至って遠い東方への旅は聖地巡礼の旅にすり変わる。「インドの酷暑」はかの遠征譚によって広く知られるところだが、シリア砂漠の暑さもそれに劣らぬものだったであろう。そしてそこで、「イエルサレムのこの上なく偉い大司教であらせられる尊師ノンミブラズメーテ・セヴォイピアーチェ（どうか非難なさらないで下さい）殿」に出会い、その所有になる無数の「聖遺物」を有り難く拝見させてもらう(43)。

そしてその、「聖霊の指一本」「窓に化身し給いし御言葉」「東方三博士に現れた星の光数本」等々の聖遺物(45)の中から、「小瓶に詰めたソロモン寺院の鐘の音少々」(47)、最初開陳するはずだった「天使ガブリエッロの羽」などとともに戴いたのがこれこの「聖ロレンツォが焼き殺された炭」(49)だと言って恭しく取り出し、かくて無事危機を切り抜けるという次第である。

ここに語られているような支離滅裂な地理と荒唐無稽なストーリーこそ、事実と空想のはっきり区別できなかつた時代にあつて、庶民にとっての偽らざる東方であつたろうし、したがってまた、マルコの書が当時の大抵の人によってどのように受

け取られたかを雄弁に物語っているのではあるまいか。現にすぐ後、十年後にはマンデヴィルの空想の『東方旅行記』が現れて一大ベストセラーとなるが、とするとチポツラ修道士の話は、マルコの続編であり、マンデヴィルの予告編だったとも言えるだろう。

2.2 近いオリエント

以上のような遠いオリエントに対して、いわゆる近いオリエントはどのように登場するであろうか。

前者が、上にみたごとく徐々にその姿を現しつつあったとはいえ、ヨーロッパにとっては基本的にはまだまだ遠い未知の地の域を出なかったとすれば、後者、ギリシャ、コンスタンティノーブルからトルコ、アルメニア、シリア、エルサレム、アレクサンドリア、カイロをへてチュニジア、モロッコへと至る地中海沿岸とアラブ・サラセンの国々は、もはや彼らにとってすっかり既知の世界であり、題材や構成において多様たらんとした『デカメロン』では、貴族や騎士の恋と冒険、十字軍と巡礼、「世界を股にかけて歩く」商人たちの交易の場、海賊たちにとっての巢窟と、西方人の活動圏として、イタリア諸都市やヨーロッパ各地と並んで必要欠くべからざる舞台を提供する。

なによりもまず、人生の有為転変、そのロマンの舞台としてであるが、その代表的なものが、美しかったがばかりに「四年の間にいろいろな土地で九度結婚した」サラセンの娘の物語(II.7)であろう。

バビロニア（カイロ）の皇帝の王女アラティエルは、ガルボ王（モロッコ）のもとに嫁ぐべくまずアレクサンドリアから船出するが、嵐にあって難破し、漂着したマジョルカ島でさる貴族に助けられてその情婦となったのを皮切りに、次いでその弟、さらにキアレンツァ（ルーマニア）ではモレーア（ペロポネソス半島）の王侯、そしてその友人であるアテネ公の手に落ち、次いでコンスタンティノーブルの王子コンスタンティーノとエジナ島（アテネ湾）・キオス島（エーゲ海）へと渡り、さらにズミルレ（スミルナ）でトルコ人の王オスベック（ウズベク・ハーン）と結婚し³³⁾、次いでその老家来アンティオコとロードス島に逃げ、その帰路友人のキプロス商人とバッファ（キプロス島）に行くが、最後には再びアレクサンドリアの父の

もとに戻った後、それでも無事処女としてガルボ王のもとに嫁ぐ。

この話の筋自体は、美貌の女性の数奇な運命とそれにからむ男たちの恋と冒険という伝統的中世騎士物語的なものであるが、しかし作者はそれを、事件中心的なものから人間中心的なものへと変えている。つまり、女の美しさの前に全てを、祖国や故郷や家族、正義・理性・忠義・名誉・道徳はもちろん友情や儲けまでも捨て、どんな「裏切りや不正」を犯してでも女を手にいれようとする男たち、また最初は何んとしても純潔・恥辱・名誉を守ろうとするが、身の不幸を嘆きつつも結局は積極的に男の愛を受け入れてしまう女の情念を語るためであった。

舞台をオリエントの様々な地に設定したのも、もちろん直接的には中世的海洋冒険譚にエキゾティズムとエロティシズムの色合いを付けるためであろうが、それよりもしたがって、恋の情欲という「人間的なこと」が、男にとっても女にとっても、人種や民族や身分はもちろん、宗教や文化や言語をも越えた普遍的なものであることを言いたいがためである。現にアラティエルが結婚した男は、ギリシャ人からトルコ人そしてサラセン人、身分は王侯・貴族・騎士・商人にまたがっているし、宗教でさえ、「自分の国の宗教によって禁じられていた」(26)にもかかわらず、ブドウ酒を口にしてその味をしめ、ついには男を「言葉では分からせることができなかつたので、仕草で誘う」(30)までに至るのである。

かくのごとくこの地域とそこに住む人々すなわちイスラムも、ダンテにおけるごとく不倶戴天の異教ではなく、恋や冒険の舞台であり、共通の人間性を備えた人々の棲むはずのところなのである。比較的近い過去の歴史的背景としてしばしば用いられる十字軍も、エルサレムの征服や教敵との戦いを英雄的に讃えるためではなく、たとえば、遠征途次立ち寄ったフランス王フィリップの失恋(I.5)、聖地巡礼の折りならず者に恥ずかしめられたガスコニュの貴婦人の報復(I.9)、奴隷に売られていた息子との偶然の出会い(V.7)、等々の「人間的な」出来事の背景である。

人種と宗教の違いを越えた共通の人間性は、恋と冒険にのみ見られるのではもちろんなく、日常の暮らしや高貴な行為の中にも観察される。たとえば、チュニジアのスーザの町に漂着したシチーリア娘コスタンツァはサラセン人の婦人の家で共に仕事をしながら楽しく暮らすし(V.2)、シチーリア王グリェルモ二世は、サラセンのチュニスの王女をグラナダの王に嫁ぐ途中で横取りしようとした孫ジェルビー

ノを、テュニス王との誓約ゆえに泣く泣くも斬首に命じる(IV.4)。こうして作者は、これらの地理的空間と歴史的背景を、敵対と憎悪と差別（異化）の舞台としてではなく、友愛と寛容と共感（同化）の舞台として積極的に借用する。

その最も美しいものは、百話の中でも最後から二番目に収められた、イスラム教徒の君主サラディンとあるキリスト教徒の騎士との間の男の友情の物語(X.9)であろう。ムスリムの英雄サラディンは、ボッカッチョの英雄でもあった。

キリスト教君主たちの十字軍の装備を直接見ようと、「商人に扮して」ヨーロッパに渡ってきたこのバビロニア（カイロ）のスルタンは、道中パヴィーアの近くで騎士トレッロの手厚いもてなしを受ける。その後何年かして十字軍に参戦したトレッロは敵地で捕虜となるが、やがてそれがサラディンの知るところとなって解放され、妖術によってベッドに寝たまま一夜のうちに故郷パヴィーアに送り届けられ、一年の期限をすぎても還らぬ夫を諦めて他の男と結ばれそうになっていた妻を取り戻すという筋であるが、トレッロが見知らぬ旅人をこの上なく親切にもてなしたのも他でもない、やんごとなき身分の「外国人」(8)だったからであり、一方この親切に対して回教王も次のように応える：

神に誓って言うが、この方よりも完全で礼儀正しくよく気の付く御方は今までいなかった。もしキリスト教徒の王たちが、彼が騎士であるように、天性の王として生まれついているならば、バビロニアのスルタンは、多くの者はもちろんたった一人でも、それに対抗することはできぬでありましょう。(35)

ここでも、旅、優雅で機知に富んだ会話、豪勢なもてなし、妻との約束、人違いによる夫婦の危機、身分や正体のちょっとしたきっかけでの露見、妖術、アラビアの富、間一髪危機など、中世の物語にお馴染みのモチーフばかりなのだが、ボッカッチョのこの話では、文化・風俗習慣・思想信条にとどまらず、内面的価値観、倫理と宗教を越えた感情や人柄や友情の普遍性、つまり「人間的なこと」が主たるテーマとなっている。したがってイスラム教徒も一人の「外国人 stranier」ではあっても、「異教徒 pagano」と呼ばれることはない。³⁴⁾

しかしながらここで注意すべきは、高貴であれ卑賤であれ、善行であれ悪業であれ、人種や身分や宗教・文化の違いを越えた普遍的な人間性を描こうとするため、

その違いが全く無視されることであろう。先にみたアラビアの王女アラティエルの振舞いにヨーロッパの女性たちとなんら変わるところはなく、イスラム教徒のサラディンとキリスト教徒の騎士トレッロの行動やメンタリティーに本質的な違いはない。違うのは衣装であり、調度であり、食べ物であり、そして生まれついた国であり地ではない。したがって地中海のオリエントも、こうした人間たちが、同じような心性と知性をもって同じような行動を巻き起こす舞台ではあっても、その地理や歴史が記されることはなく、ましてやその文明や文化の違い、そして人間の異なりが述べられることはない。サラディンが誓う「神」も、トレッロが感謝する「神」も、同じ Dio である。

こうした「相対化」の代表的な例が、かの有名な三つの宗教と三つの指輪の話(I.3)であろう。

ここでも主人公はサラディンである³⁵⁾。言いがかりをつけて危機に陥れようとするこのスルタンの、「ユダヤ教かイスラム教かキリスト教か、三つの宗教のうちどれをおまえは本物と考えるのか、余は知りたいものじゃ」(8)との質問に、アレクサンドリアの高利貸し、ユダヤ人メルキセデックは、本物と見分けのつかない三つの指輪の例を挙げて：

父なる神から三つの民に与えられた三つの宗教についても、それぞれが自分こそその遺産と真の宗教と掟を正当にもちかつ奉じていると思いついでいるのですが、しかし誰がそれをもっているかは、指輪の場合と同じように、問題はまだ未解決のままぶら下がっているのです。(16)

と答えて危機を切り抜ける。

この話のテーマは、質問の罨をうまくかわした答えの機知にあり、この相対的宗教観は、判定を回避する消極的なものでしかないとはいえ、己の宗教がまだまだ「絶対的」なものであった時代と社会にあっては、「人間的なこと」がそうしたものを超えた普遍的なものであること、「人間自然の法則」を示さんとする作者には、まず設定すべき大前提であったに違いない。だからこそボッカッチョはこの話を、最初にみた、偽りの懺悔で死後聖人にまつられた極悪人チャッペレットの話(I.1)、次いで、他教徒であるがゆえ死後「地獄に墮ちる」のが怖いからではなく、「情けない汚れきった」ローマの実状を親しく目にしたがゆえにキリスト教に改宗したパ

りの大金持のユダヤ人アブラハムの話(I.2)で、逆説的に宗教の絶対性に挑んだ後、これを第三話に据えたのではあるまいか。³⁶⁾

以上は、どちらかといえばアラビアやペルシャの伝説・物語や中世騎士物語から受け継いだ貴族や騎士にとっての地中海とオリエントであり、その舞台に昔ながらのエキゾチックな臭いが立ちこめているのに対して、当時の新興階級たる市民と商人たちにとっては、地中海とオリエントは、新たな活躍の場、儲けの場を提供してくれる地である。ここでも、金と欲、仕事と能力の論理の前に、人種も身分も宗教も文化もその違いは問題でなくなる。現にそこには、フェデリーコ二世のパレルモを思わせるような、商業と労働の国際共同体が形成されていた。³⁷⁾

たとえば、妻の貞操を賭けたばかりに敗れて出奔してしまった夫を探しに船乗りに変装して海を渡った気丈な妻シクラノは、最初カタルーニャのさる紳士の、次いでアレクサンドリアのスルタンの好意を獲得し：

・一年のある時期、大勢のキリスト教徒とサラセンの商人が見本市のような形でアークリ（それはスルタンの支配下にはありました）に集まることになっており、商人と商品が安全であるようにと、スルタンはいつもそこに、役人の他に自分の家臣の誰かを、警備にあたる兵士とともに派遣する慣わしにしていたのですが、その時期になったので、もう充分に言葉ができるようになっていたシクラノをその仕事に派遣することに決めました。(II.9.45-46)

あるいは、シチーリア近くのリバリ島の若者マルトゥッチョ・ゴミトは、バルベリア沿岸でサラセンの海賊に襲われ、トゥニジアの牢に放り込まれるが、そこへグラナダの大軍が攻め寄せてきたとき、「バルベリア語に通じていた」彼は、王マリアブデラに、普通よりも「細い弦の弓」と「細い溝の矢」を使えば敵はその矢を再利用できなくなるという秘策を進言し、それによって勝利した王から「高い地位に取り立てられて裕福に」なる(V.2)のだった。³⁸⁾

地中海はまた、昔もその後も海賊たちの棲み処でもあった。彼らにとってはもちろん国籍や身分や文化や宗教の違いは存在しない。貧弱な肉体の持ち主だったピーサの裁判官キンツィカの若く美しい妻が走った相手はたくましいモナコの海賊バガニーノだったし(II.10)、一儲けしようとチプリ（キプロス）へ船を出したが商品がさばけずして破産したラヴァッロの商人ランドルフォは、そこで海賊に早変わり

して、「誰であれ手当たり次第に、が主としてトルコ人の財産を略奪」(II.4.9)しにかかり、一年のうちに元を取るが、イタリアへの帰路、今度は「コンスタンティノープルからやってきたジェノヴァ人の二隻の大型帆船」に略奪される(14)。

商人が往来し海賊が横行する地中海という舞台で、絹や香料に劣らず活発に取り引きされていたもう一つの重要な商品は奴隷であった。召使いを必要としたシチーリアの貴族アメリーゴ・アバーテ・ダ・トラパニは：

エルミニア [アルメニア] を略奪してたくさんの子供たちを捕まえてきたジェノヴァ人の海賊たちのガレー船が東方から到着したので、トルコ人だと思ってその何人かを買いました。(V.7.4)

その「羊飼い」のような子供たちのうち、テオドーロという少年だけは「上品」だったので奴隷の身分から解放されて家令となるが、その貴族の娘と恋に陥り、妊娠させてしまう。そのため絞首刑を宣告されるが、刑場へ引かれてゆく途中、その町に滞在していた、「十字軍のための重大なことについて教皇と協議すべくエルミニアの王から使節としてローマに派遣されていた」(V.7.32)貴族の子供と分かり、めでたくその娘と結ばれる。³⁹⁾

この話も、地中海を舞台とし十字軍や海賊を背景とした貴族たちの運命の転変であり、身分を越える恋の情念、偶然の親子の出会いといったものがテーマなのであるが、ここにはまた、端なくも露呈しているように、西洋的に「上品」でないが故に解放されぬ多数の奴隷の存在と、したがって作者ボッカッチョのいう「人間性」の限界をも示していた。

3 おわりに

『デカメロン』が「この世」を舞台とすることは、以上にみてきたごとく、事実そのとおりであったが、だからといってしかし、「あの世」が否定されているわけではない。ボッカッチョにとっても当時の誰にとっても、神も彼岸の世界も存在し、天国も煉獄も地獄も、天使も悪魔も実在するものであった。いかなる悪逆非

道を犯そうと、冒瀆と愚弄を為そうと、神と靈魂そのものが否定されているわけではなく、したがって「中世の否定」となっているわけではない。

だが、「人間的なこと」を描こうとする作者は、かつてのごとき絶対的なものとしての神や宗教そのものを描写の対象とすることはせず、したがって「あの世」を舞台とすることもしない。宗教でも「この世」での在り様、善であれ悪であれそれをめぐる人間の姿、多くの場合は聖の側の腐敗や墮落、神の名のもとに行われる偽善や欺瞞を暴き、風刺やパロディーの手法でもって宗教の超越性や神秘性を引き剥す。

たとえば煉獄とは、修道院長が不倫相手の女の夫を麻薬によって送り込む「墓穴」のことであったし(III.8)、地獄とは、修道士ルスティコが自分の「悪魔」(男性器)を送り込む相手である隠遁志願の娘アリベックの「穴」(女性器)のことであり(II.10)、天国とは、修道士アルベルトが天使ガブリエッロの姿となってリゼッタ夫人と交わるその「寝室」のことであった(IV.2)。天使も悪魔も、このような形で登場させられていた。その天使ガブリエッロの羽も、どのように使われていたか、前にみた。

こうして「あの世」が、その聖性と超越性を剥ぎ取られ、愚弄され茶化されて世俗的・現世的なものに、つまり「人間的なこと」とされたように、かつてはそれら三界にも劣らぬ異界であった「驚異と幻想」「怪奇と野蛮」の東方も、その神秘性と異性を剥がされて、同じ変容を被る。

ダンテでは「地獄の怪物ジェリオーネ」の体の模様を表現するのに用いられていた「タルタルとインドの織物」は、前にみたごとく、修道士チポッラの付き人グッチォの不潔さを表すことに使われていた。かつて東方を構成する必須の項目であったもののうち、司祭王「プレスター・ジョン」は、その妃がフィレンツェの庶民たちの好色な空想の対象だったし、「山の老人」の麻薬ハッシッシもどのように使われていたかすでにみた。さらには、かつて古代にあっては輝かしき英雄アレクサンドロスの遠征先であり、中世にあってはエルサレムと地上樂園の存在する方向への巡礼先であり、次いで十字軍遠征、そして最も近くは修道士たちの布教の目的地であり、商人たちの交易の地であった東方が、いかに変容させられているかは、その集大成たるチポッラ修道士の旅の話にみた。

このように、『デカメロン』の中で東方あるいは非ヨーロッパ世界は、地中海沿岸の彼らにとって近いオリエントがもはや彼らの既知の世界に属し共同の活動圏を構成していたのに対して、まだ未知の遠いオリエントの方は、その外にあってなお古代から中世に伝えられた伝説や寓話を土台としながらも、「驚異と幻想」あるいは「怪奇と野蛮」といった伝統的な東方像が、そのまま持ち出され語られるのではなく、聖職者であれ商人であれ生身の人間の自らの体験として物語られ、当時の人々の生活の中で、様々な欲望やからかいの対象となっていた。すなわち西方は、東方を語る主体と聞く主体を持ったのである。

とすると、ボッカッチョにとっては「自なるもの」とは当然ながら「人間的なこと」であり、「異なるもの」とは「人間的でないこと」となる。そして「人間的でないこと」とは、その「人間的なこと」の障害となるもの、すなわち身分や家柄、権威や権力であって、人種や民族や宗教の違いは、そのままではなんら「非人間的なこと」ではなかった。したがって、それらを異にする者も、異にするが故に「異なるもの」ではなく、その人間が「人間的」であるかぎり、そのまま「自なるもの」であった。だからこそ作者は、それらを超える恋愛や友情の様々な場合を様々な土地に設定したのだった。したがって、「東方」は東方であるが故に「異なるもの」とされることはなく、人種的・宗教的偏見はみられず、事実「バルバロ」なる言葉はどこにも使われていなかった。そうした意味で、東方はよく西方と「相対化」されていた。

ところが一方では、その様々な土地はあくまで、そうした違いをもたぬ、作者のいう「人間的」な人間が行動し、様々な「人間的」な出来事が起こる舞台であって、その土地そのものが描写されるわけではなかった。東方もまた、舞台として借用されるだけで、東方そのものが描かれるわけではない。人間もそうであり、東方人もまた西方人と同じメンタリティーを持って登場し、その固有の文化や考え方を持ったものとして描かれることはなかった。描かれるのは、違いと変化を生み出すための小道具としての宗教・場所・外観である。とすると、なるほど「異化」はされなかったが、東方は、かく「相対化」されることによって西方に「同化」され始めていることになろう。

以上を要するに、こうしたボッカッチョの世界像（コスモロジー）は、前にダン

テの場合にみたごとき、キリスト教の名の下での西方を中心とする中世的な一元的世界像から、文明の名の下での近世的な西方中心主義の一元的な世界観へと移行する過渡期にあるものといえよう。いわば、「人間」の名の下での結局は西方中心的な異世界の同化過程を示すものとしてある。

それはまた、「普遍」（カトリコ）を旨とするキリスト教の論理であり、国境をも文化をも越える金と商の論理でもあった。「ポルチェッラーナの認可証の獲得」のために東方に出かけたというチポッラ修道士や、一山当てようと東方へ出かけていったラヴァッロの商人ランドルフォ(II.4)は、カルピニヤルブルクらかつてのフランチェスコ会とドミニコ会や後のイエズ会の宣教師たち、そしてポーロ一家に代表される多数の商人たちと、その前後の西方から東方への彼らの進出を象徴し、さらには後の宗教的・商業的征服の対象としてのオリエントを予告するものとなっている。

しかしもう一方では、今までになかった東方が出現していた。その代表が、国では「カタイ」であり、モノでは「ポルチェッラーナ」であった。そのカタイも妖怪変化の棲むところではなく、大富豪でありながら滅我的な謙虚な東洋的人生観をもった老人の住む地であり、ポルチェッラーナも単なる珍品ではなく、その後西方が数百年をかけてその「特権」を獲得することになる瓷器のことであった。これらは、その後いく時代かを経て始まる東洋文明、その思想と芸術への関心の前触れとなっていたし、絹や香辛料に代わって新たな欲求と交易の対象となる国とモノを予告するものであった。

こうした、一つはチポッラ的な戯画化ともう一つはナータンの理想化は、その後近代における東方像の二つの大きな流れを形作ってゆく。そうした意味でも『デカメロン』は、新しい時代の始まりを告げるものであった。

1 * [初出：《大阪国際大学紀要》第23号-1, 1997, pp. 19-43。図版および写本は今回新たに加えたもの。]

2 Dante Alighieri, *La Divina Commedia*, a cura di Tommaso di Salvo, Bologna Zanichelli 1991, pp.635-36. []内は訳者注（以下同）。

3 Giovanni Boccaccio, *Decameron*, a cura di Vittore Branca, Torino Einaudi 1987

p.5 (以下略称 Branca)。(Pr.2)は「序 Proemio」第2節を指す。両書の成立年代は、『神曲』1310-20年頃、『デカメロン』1348-53年頃とされる。

参照文献：柏熊達生訳『デカメロン』全三巻、筑摩書房 1987; Vittore Branca, *Boccaccio medievale*, Firenze Sansoni 1981; Id., *Giovanni Boccaccio Profilo biografico*, Firenze Sansoni 1977; Manlio Pastore Stocchi, *Tradizione medievale e gusto umanistico nel "De Montibus" del Boccaccio*, Padova 1963; Giorgio Padoan, 'Mondo aristocratico e mondo comunale nell'ideologia e nell'arte di Giovanni Boccaccio', 《*Studi sul Boccaccio*》II, Firenze Sansoni 1964, pp.81-216; Virginio Bertolini, 'Le carte geografiche nel *Filocolo*', Id. V 1969, pp.212-25; Manlio Pastore Stocchi, 'Dioneo e l'orazione di frate Cipolla', Id. X 1977-78, pp.47-61; Giorgio Padoan, 'Sulla novella veneziana del *Decameron* (IV 2)', Id. pp.17-46; Robert Hollander, 'Boccaccio's Dante: imitative distance (*Decameron* I 1 and VI 10)', Id. XIII 1982, pp.169-98; Luu Tong Liu - Vittore Branca, 'Il *Decameron* in Cina', Id. pp.389-95; アンリ・オヴェット (大久保昭男訳) 『評伝ボッカッチョ』新評論 1994。

4 (VII.10.26-29)は、第7日第10話26-29節を指す。以下該当ページは省略する。

ちなみにこのティンゴッチョの話は、地獄であれ煉獄であれ天国であれ「あの世」の様子が直接描かれている唯一の例である。時代的には、いくつかが古代や中世前期に設定されている。クリスト・聖母マリーア・使徒たち、あるいは動物や超自然的存在を主人公にしたものもない。

5 この寓え話も東方起源とされ、『ラーマーヤナ』では世捨て人とその息子、『バルラムとヨサファ』では王とその子の話として登場する。西方には『例話集』、『黄金伝説』(180)、ポーヴェの『大鑑』(XV 91)などをつうじて広く知られた。『ノヴェッリーノ』(XIII)にも収められている(Branca p.462 n.5)。

6 Cf. 前掲「ジパングの系譜」(一)、および拙稿「マルコ・ポーロとダンテ—ダンテの沈黙をめぐって」『池田廉教授停年退官記念論文集』大阪外国語大学 1993, pp.45-64.

7 晩年の作に『山、森、泉、湖、川、池あるいは沼ならびに海の名称について』(c.1374, 未見)があるが、Stocchi によれば、これも古典に登場する地名の考証が主で、現実の

地理を扱ったものではなく、また現象的な地球像についてのボッカッチョの知識は中世的な域を出ず、オロシウスの三分割された世界像（TO図）だったであろうとのこと。

8 これと同じ用法が第7日第7話、学者リニューリが恋して恥を搔かされた未亡人エレナに復讐する場面にある：「たとえその恋人殿がインドにいらっしゃいましょうと、私はその者を彼女のもとに帰ってこさせ、許しを乞うようにさせましょう」（VII.7.50）。

9 ただしダンテでは、インド人ではなく「トルコ人」。地獄の怪物「不潔極まる欺瞞の化身」ジェリオーネの体の模様をたどって：「タルタル人もトルコ人も、これほど多彩な地と紋の織物を作ったことはなく」（Inf.XVII.15-6）。ボッカッチョの場合も、黒海以東のアジア中央部、トルコから中国・カタイまで全体を漠然と指すものと考えられる。

10. 父 Boccaccino は、バルディ商会のナポリ代表として王室の財政に深く係わっていた。ボッカッチョ(1313-75)のナポリ滞在は、1323/25-40年。当時バルディ商会には、『東方交易案内』（c.1330）を書いたペゴロツティ(c.1290-c.1347)がおり、1310年頃から勤務し、アントワープ(c.1315-17)、キプロス(1324-27, 35)に駐在したことが知られている。面識があったかどうかは不明だが、ボッカッチョはそうした環境の中で多くの東方情報に接したことが想像される：cf. H. Yule & H. Cordier, *Cathay and the way thither*, vol.3, London 1914, pp.137-73。著名なフィレンツェ『年代記』の作者ヴィッラーニ(c.1280-1348)も最初ペルツツィ次いでブォナッコルシの商社員、『古譚三百話』のサッケッティ(c.1330-c.1400)も商人。

10⁻¹* [拙訳「ナタンとミトリダネス」『原典中世ヨーロッパ東方記』名古屋大学出版会、2019、pp. 736-42。写本図2]

11 編者 Branca 註によれば、この話にもマルコ・ポーロの書が踏まえられているが、フィレンツェ人の政治的・商業的に伝統的な反ヴェネツィア感情から「ジェノヴァ人」に変えられたのであろうとのこと(p.1128 n.1)。典拠を曖昧にしておくという、物語の常套手段もあるだろうが、しかしそうした理由からだけではあるまい。後にみるが、マルコの旅行記は他の異国物、特に東方物（シモーネ先生の話、山の老人の粉薬の話、チポッラ修道士の話）にも下敷きに用いられており（しかもそれらは最も面白くよくできたものの一つである）、自分もよくは通じていぬしかし確かに存在する新しい世

界を、同じ商の世界に属する者が散文でしかも興味深く語ったその書に、知識人としてそして物語作者として魅力と対抗心を同時に感じていたからではあるまいか。いずれにしてもマルコ・ポーロとボッカッチョというのは興味深いテーマであり、いずれ稿を改めて取り組んでみたい。＊ [写本図2]

12 「サムエル記下」5-12, 「列王記上」1, 「歴代史上」14,17.

12⁻¹* [写本、図2・3]

13 ボッカッチョが目にしたと思われるパオリノーの地図 De mapa mundi (註21参照)でも、世界は三分割され、アジアの東限はインドとのこと(Bertolini p.216)。1362年頃書かれたマンデヴィルの空想の『東方旅行記』でも、インドとカタイの位置的關係は明確でない(大場正史訳、東洋文庫 1987)。「カタラン地図」の登場は1375年。ただし、『デカメロン』では空想の地は一つもなく、全て特定されていることが知られる。

13⁻¹* [写本図3]

14 Marco Polo, *Il Milione*, a cura di Luigi Foscolo Benedetto, Firenze Olschki 1928, capp.82-105 pp.72-100 (以下略称 Benedetto);愛宕松男訳『東方見聞録』1、東洋文庫 1985、第91-117章 pp.193-273 (同 愛宕)。「カタイ」について最初に伝えたのは、マルコに先立つカルピニ(東方行 1245-47)、ルブルク(同 1253-55) (cf. 拙稿「ジバングの系譜」(二))。

晩年の作だが『神曲釈義』(1374)でボッカッチョは、謎の怪獣「ヴェルトロ」の解釈の中で、人間の「貪欲から鷹揚へ」の方向転換は「圧倒的な富が集まった中世の帝国タルタリアに始まる」とし、「タルタル人の皇帝たちの鷹揚さと富は、我々と比べて信じ難いほどのものである」にもかかわらず、彼らは死ぬと「フェルト」の布一枚にくるまれて埋葬される、ことを紹介している：*Esposizioni sopra la Comedia di Dante*, Mondadori 1965, p.91.

予言者ナタンの関係でなら、彼がその即位に尽くしたダビデの子ソロモンがエルサレムに建てた豪華な神殿が想起される(「列王記上」5-10、「歴代史下」1-9)。

15 Branca 註には典拠として、ペルシャの詩人 Saadi の Bostan, 小話集 *Mahbub ub Kalub*, Hatim Tai のアラビアの説話集などが挙げられている。屋敷の幾つもの門から出入りして何度も施しをもらう老女のエピソードに似たものとしては、*Vitae Patr*

um 中の Giovanni Elemosiniere (慈善家ヨハネ) の話と *Legenda Aurea* (27)にみられるとのこと (p.1127, n.2)。榎一雄氏も「『デカメロン』とアジア」(『ヨーロッパとアジア』大東出版社 昭和58年、pp.17-30)で、同様な観点から、「必ず中国に類話がある」と考えられるが見あたらない、としている。

また、鷹揚さ比べといった麗しい物語にふさわしい場所として、まだよく知られぬ遠くの地に舞台を設定したという意味で、この「カタイ」は、『神曲』において、クリストは知らないが言行正しき人間としてダンテが設定した「インド」(Par.XiX.70-78)に当たるのではあるまいか(前掲「ジバングの系譜」(一) pp.84-5)。

16 ウズベク・ハーン(在位 1312-40):イスラム教を正式に採用したキプチャク・カン国最盛期の君主。教皇庁、カイロ、ビザンティン、モスクワの宮廷と良好な関係にあり、三人の娘をそこに嫁がせた。黒海とクリミアでヴェネツィア特にジェノヴァとの通商を盛んにした。その名は、ビザンティンやアンジューの宮廷を通じてイタリア商業界にも知られていた(Branca p.245 n.6)。

17 「プレスト・ジョヴァンニ」に関しては、Friedrich Zarncke, 'Der Priester Johannes', 《*Abhandlungen der philologisch-historischen Classe der konigl. Sächsischen Gesellschaft der Wissenschaften*》, Leipzig Bei. S. Hirzel, 1879 pp.825-1030, 1876 pp.1-186; 前掲「ジバングの系譜」(二)。別の版では欄外に、「ケツの穴に角まで生やしている」とあり、その妃「スキンキムツラ schinchimurra」はボッカッチョの造語、意味不明とのこと(Branca p.989 n.3)。プレスト・ジョヴァンニはマルコ・ポーロでは、チンギス・カンと戦って敗れたケレイト部のワン・ハン。

18 Branca 註によれば、「グメドラ gumedra」は‘スックメドラ succumedra’ (駄馬)からの造語、「アルタリージ Altarisi」は‘アルターレ altare’ (祭壇)と‘アルタイ Altai’を掛け合わせたもの(p.991, n.8)。しかし、「アルタイ」の語が見えるのは、当時の旅行記ではマルコの書のみで、しかも「チンギス・カンの家系の子孫だった大君主は全て、アルタイと呼ばれる一大山に運ばれて埋葬される」(Benedetto cap.69 p.53)と、歴代君主の埋葬地として挙げられるだけで(cap.71 p.57 も同様)、ボッカッチョが「アルタイ」の語を知っていたとする積極的な根拠を見つけるのは難しい。むしろ、「タルタリ」のもじりと考えた方が有り得るのではないか。「タルタル」なる名は、十三世紀に突如としてヨーロッパの境界に姿を表したモンゴル人が、その奇

怪な容貌ゆえ、ギリシャ神話の「タルタルス」（地獄）から出てきた悪魔のようだと
言うに由来していたことはよく知られる：cf. 拙稿「ゴグ・マゴグとモンゴル」《大
阪国際女子大学紀要》第9号 1993、pp.75-91.

19 「山の老人」についても、まとまった形で最も早く紹介したのはマルコの手紙とされ
る：Benedetto capp.41-3 pp.32-5; 愛宕 第42-4章 pp.87-94. Branca 註によると、ボ
ッカッチョはこれに関する Paolino Veneto の年代記中の記事をその *Zibaldone Ma
gliabechiano* に書き写しているとのこと(p.420 n.1)。

20 ペストの発生源については諸説あって定まらない。1338-39年にかけてイリ溪谷一帯
で猛烈な疫病が流行し、これをペストの発端とする説もある。いずれにしても、東方
中央アジア草原に発し、それが西方に持ち来られたとするのがヨーロッパ側の共通
の理解のようである：cf. 「11世紀以来、ジェノヴァ商人は黒海沿岸にいくつかの海外
支店を持っていたが、1346年、その支店の一つであるカーファがモンゴル人によって
攻囲された。モンゴル軍の間ではペストが流行し、多くの死者が出たが、彼らはそれ
らの死体を、投石機で籠城陣営内に打ち込んで厄介払いをした。パニックに陥った住
民は、病原菌を身につけたままガレー船に乗り込み、シチリア方面へ逃走した」（フ
レデリック・ドルーシュ編『ヨーロッパの歴史——欧州共通教科書』東京書籍 1994、
p.168）。こうした説の発端となった、そのガレー船に乗って帰国したというイタリア
人公証人ガブリエーレ・ディ・ムッシの証言は、今では疑問視されている：cf. 蔵持不
三也『ペストの文化誌』朝日選書 1995、pp.55-79, 380.

ペトラルカにもペストについて記した詩があるが、ボッカッチョとよき対照をな
す：cf. 近藤恒一編訳『ルネサンス書簡集』「自己自身に」岩波文庫 1989、pp.204-17.

21 * [拙訳「チポッラ修道士の旅」『原典中世ヨーロッパ東方記』名古屋大学出版会、
2019、pp. 728-35。]

東方に関するボッカッチョの知識の源泉としては、諸文献には次のようなものが挙
げられている：Fra Niccolo da Poggibonsiの*Libro d'Oltremare* (ヴェネツィアから
エルサレムにいたる聖地巡礼案内、著者の旅は1346-50年の間)；Marin Sanudo il V
ecchio(1270-1343)の*Liber Secretorum Fidelium Curcis* (1337. 新十字軍の提案、東
地中海沿岸部の地図付き)。教皇ヨハネス22世の命により1321年にそれを検討して
編んだポッツォーリのヴェネツィア人枢機卿 Paolino Veneto の年代記 *Chronologi*

a Magna (Chronographia)。ボッカッチォは、*Zibaldone Magliabechiano*の中にそれから様々な抜き書きをしており、パオリーノとは知り合いで、サヌードもナーポリに滞在した(1331/32)ことがある。Hayton の *Historiae Partis Orientis* (これについても同書に抜き書きがある) (cf. 拙訳「ハイトン『東方史の華』(一、二、三)」《大阪国際女子大学紀要》第20-21号、1994-5)。カルピニの東方旅行記 *Historia Mongalorum* も Vincent de Beauvais の *Speculum Historiale* (c.1256)の中で読んでいたものと考えられる。さらには Giovanni Villaniの *Cronica* (かなりのモンゴル、特にイル・カン国についての記事を含む)。アレクサンドロス物語については、*Epistola Alexandri de situ e mirabilibus Indiae* を持っていたことが知られる(*Zibaldone Laurenziano*)。他にも Quinto Curzio や Gualtiero Chatillon のもので読んだと考えられている。

21¹* [写本、図4]

22 カルピニ、ルブルクについては、*Sinica Franciscana*, vol.I, 'Itinera et Relationes Fratrum Minorum. Saeculi XIII et XIV', ed. P. Anatasius von den Wyngaert, Clara Aquas (Quaracchi-Firenze), Collegium S. Bonaventurae, 1929; 護雅夫訳『中央アジア・蒙古旅行記』光風社 1989; 拙稿「ジバングの系譜」(二)。

23 'il Porcellana'と大文字で始まる男性単数名詞で、すぐ後に続く他の語と同じく地名として用いられており、Branca 註によると、San Paolino 付近にその名の通りと病院があったとのこと。前出の従者グッチォがその不潔さ故に Guccio Porco と呼ばれたこと、コヤス貝が豚の陰門との類似と連想から porcellana と呼ばれたこと、などの意味も含まれているであろう。またSan Filippo 病院の守衛として、Guccio Porcellana とか frate Porcellana なる名の人物が実在したことなどが確かめられている(p.769 n.8)。

コヤス貝についてはマルコの旅行記では、例えばカラジャン(雲南)地方のところで、「彼らは次のような形で貨幣を使っている。すなわち、白いコヤス貝——海にあり犬の首につけるあれ——を使い、コヤス貝80個が銀1サッジョ、2ヴェネツィア・グロッシに値する」(Benedetto cap.119 p.115; 愛宕 p.306)。この箇所は、T(トスカナ語写本)にのみ、「それから碗を造るコヤス貝」(ed. D. Olivieri, Laterza 1912, p.138; ed. V. Bertolucci Pizzorusso, Adelphi 1975, p.183)とあることが知られる(ただ

しこの文は、例えば Olivieri の版では [] 内に入れられており、写字生または編者の補筆の疑いが濃い。Benedetto の集綴訳でも採用されていない）。

24 Cf.三上次男『陶磁貿易史研究』全三巻、中央公論美術出版 1987；同『陶磁の道』岩波新書 1969；愛宕松男『東洋史学論集』第一巻・中国陶瓷産業史、三一書房 1987。これらの書によると、中国陶磁器の輸出は9-10世紀に始まり、13-4世紀には大量に、特に西アジア方面に持ち運ばれた。

瓷器は陶器に比べて薄手で堅く透明性に優れ、その性質は、後者が800度前後で焼かれるのに対して前者は1300度前後と、高温で焼くことで得られる。この高温を得るには、胎土（高嶺・カオリンと白不子・ペイトンツ）、釉（白不子）、燃料（石炭）、窯（登窯）が揃わねばならず、この時代では中国（とその技法を学んだ朝鮮・日本）以外では不可能だった。

宋・元代の陶磁器はイスラム諸国より西つまりヨーロッパでは発見されないとされ、三上次男「中世のイタリアと中国陶磁」（前掲書（中）pp.287-94）によると、イタリアで見つかったのは、同氏の確認された限り、ルチェーラの廃城址で12-3世紀の青磁3片と白磁1片、アレツォの中世美術館の14世紀元染付の長口瓶のみとのこと（ヨーロッパでは他に、スペインのアルメリアに2片）。ルチェーラの城は、最初1233年フェデリーコ2世によって館として築かれ、後にアンジューのカルロ1世によって堅固な城壁を巡らせて城塞とされた(1269-85)ものであることからして、直接中国から輸入されたものではなく、エジプト辺りからもたらされたものであろうが（またルチェーラハサラセン人の居住地のあったことが知られる）、とすると、彼らと関係の深かったパレルモやナポリにも残っている可能性が極めて高いのではあるまいか。いずれにしても、早くからイスラム圏には大量に輸入されていたこと、ヨーロッパでも数百年後には大きなブームとなることを考えると、興味深い問題を提示する。

ヨーロッパでは、1708年に初めてベドガーがドレスデンで磁器の制作に成功した（大量生産が始まったのは1910年マイセン）。同じ18世紀初め、中国陶磁器の製法を初めてまとまった形で伝えたのは、実際に修道士、ただしイエズス会のダントルコール（『中国陶瓷見聞録』小林太市郎訳注・佐藤雅彦補注、東洋文庫 1979。Le P. Francois Xavier d'Entrecolles (1664-1741):リヨン出身のフランス貴族、1699年中国に渡って布教）。ついでながら、したがってこのPorcellana を「陶器」あるいは「陶磁器」

と訳したのでは意味をなさないことになる。

24¹* [写本、図4]

25 「グロッソ」は、当時のヴェネツィア銀貨の「大」の方で、直径22ミリ、重さ1.962グラム。

26. Benedetto cap.158 p.160; 愛宕 2、第172章 pp.115-6.

「コヤス貝」を示す *porcellana* がいつ誰によってどのようにして「瓷器」を意味するようになったかは確定されず、マルコに先立つ用例を含んだ文献はまだ発見されていないが、彼をその嚆矢とすることは否定的である。瓷器の白さ・輝き・曲面がコヤス貝のそれに似ていたからとする説と、コヤス貝の貝殻を砕いてその粉を粘土に混ぜて焼き、あの白さと輝きを得たと想像されたからとする説がある：cf. Paul Pelliot, *Notes on Marco Polo*, Paris I-1959, II-1963, 'PORCELAIN' pp.805-12(ボッカッチョの用例は採用されていない)、'COWRIES' pp.531-63.

同旅行記の Z(セラダ写本)と R(ラムージョ訳イタリア語版)には、その製法についての言及があることが知られる。R「彼に語られたところによると、次のようである。すなわち、鉱脈のようなところからある種の土を集め、それを大きな山と積み、三十年か四十年の間、雨・風・陽にさらしたまま動かさない。その間に土は精練されて、後でかの碗を作ることができるようになる。そしてその上に好みの色を付け、窯の中で焼く。だからその土を集める者はいつでも、自分の子や孫のために集めることになる」(Giovanni Battista Ramusio, *Navigazioni e Viaggi*, vol.3 pp.248-9).

Zもほぼ同内容だが、色については、「その土から作られた碗は青色をしている。そしてとても光輝き、この上なく美しい」とあるだけで(*The Description of the World*, II, ed. A. C. Moule & P. Pelliot, London 1938, p.lv-lvi)、ラムージョの「その上に好みの色を付ける」の文はない。また R では、「色」は *colori* と複数になっている。ところが、マルコが中国に滞在した13世紀後半には、白瓷にブルーのコバルト顔料で絵付けした青花いわゆる染付が始まったばかりで、多色の絵付け瓷器は泉州地方ではまだ作られていなかったことからして、かの一文は後世の加筆の疑いが濃いことが指摘されている(愛宕 2, pp.120-21)。ラムージョとその版については、cf. 拙稿「ラムージョ「マルコ・ポーロの書序文」(一)」(『愛媛大学教養部紀要』第24号 1991、pp.53-106)。

マルコ・ポーロの旅行記では、他には陶磁器についてはどこにも述べられていない。
また遺品リストの中にも見当たらない:cf. A. C. Moule & P. Pelliot, *Ibid.* II pp.5
54-58. 元来陸上ルート「絹の道」の商人であったポーロ一家は、もっぱら海上ルート
「陶磁の道」で交易された陶磁器にあまり関心がなかったか。

27 Branca pp.768-9 n.8.

28 Branca p.769 n.7.

29 Benedetto c.97, pp.91-3; 愛宕 1 第107章 pp.244-8. ただし、ルブルクの旅行記は
当時一般に流布していず、ボッカッチョがこれを目にした可能性は極めて低い。

30 アレクサンドロス物語については、cf.フラウィウス・アッリアノス（大牟田章訳）
『アレクサンドロス東征記』東海大学出版会 1996；芳賀重徳訳『ナポリの主席司祭
レオ訳アレクサンデル大王の出生と武勲』近代文芸社 1996；*The Life of Alexander
of Macedon by Pseudo-Callisthenes*, tr.& ed. Elizabeth Hazelton Haight, New
York Longmans, Green and Co. 1955（拙訳「偽カリステネス『マケドニア王アレ
クサンデル伝』」（一、二、三）、《大阪国際女子大学紀要》第20-22号、1994-96）。
アレクサンドロス伝説の中でも、「鉄門」「太陽と月の樹」「ゴグ・マゴグ」などは
『デカメロン』には登場しない。

31 Branca p.770 n.7.

32 「デナロ denaro」は、当時のヴェネツィア銀貨の最小単位で、ソルド soldo の20
分の1、リラ lira の240分の1: Cf.前掲「ラムージョ「マルコ・ポーロの書序文」(一)」
pp.96-7.

33 註16参照。

34 サラディンとその一行は皆、「ラテン語」まで知っている(16)。ただしこのラテン語
は、Branca 註によれば「イタリアで話されている言語」とのこと(p.1209 n.9).

35 歴史上の人物で二話にわたって主人公として登場するのはサラディンのみである。
サラディンの寛容は西方でも広く知られていた。

36 第5日第1話、エーゲ海を舞台とするチモーネの恋と冒険の話では、「神々 gl'iddii」
と小文字複数形が使われている(V.1.38 e passim)（他は全て Dio/Iddio/Idio）。これ
は、冒頭で「かつてチプリ [キプロス] 人の昔の物語の中で読みましたように」と断
つてあるところからすると、古代ギリシャかローマの話から直接採ったためか。Bran

ca 注では、確実な典拠は発見されず、アレクサンドロス物語の派生ものとの関係がありそうだとされている(p.593 n.1)。

37 Cf. 高山博『中世地中海世界とシチリア王国』東京大学出版会 1993。

38 Branca 註によれば、これとよく似た戦術が、ヴィッラーニ『年代記』1299年の条にイル・カン国のガーザンのものとして紹介されている(p.609 n.1);cf. *Cronica di Giovanni Villani*, lib.VIII cap.35, Roma Multigrafica Editrice 1980, tomo III pp.47-51.

39 Trasselliによれば、これは1264-65年 Calatayud のアラゴンのペドロのもとに出かけたアルメニア使節。ポーロ兄弟の第一回東方行(1254-69)の時期に当たる。当時の小アルメニア・キリキア王国については、Hayton, 'La Flor de la Terre d'Orient', *Recueil des Historiens des Croisades, Documents Armeniens*, Tome II, ed. C. Kohler, Paris 1906, pp.111-363 (前掲拙訳「ハイトン『東方史の華』」)。

奴隷の主たる供給地であったのは、ここにもあるとおりアルメニアや黒海周縁の諸地、人種はキプチャク人・スラブ人・ギリシャ人・アルメニア人・トルコ人・モンゴル人ら、最も大量に購入したのは、そもそもそうして輸入された軍人奴隷によって創始されたエジプトのマムルーク朝、供給にあたったのはもっぱらイタリア特にジェノヴァの商人。フィレンツェでも1336年のシニョリーアの布告で、キリスト教徒ではなく異教徒であることを条件に奴隷の輸入が正式に認められ、とりわけ1348年のペスト流行後の労働力不足のためかなりの家内奴隷が輸入された：cf. 清水廣一郎『中世イタリア商人の世界』平凡社 1984, pp.97-101；イリス・オリーゴ（篠田綾子訳）『プラートの商人』白水社 1997, p.121。

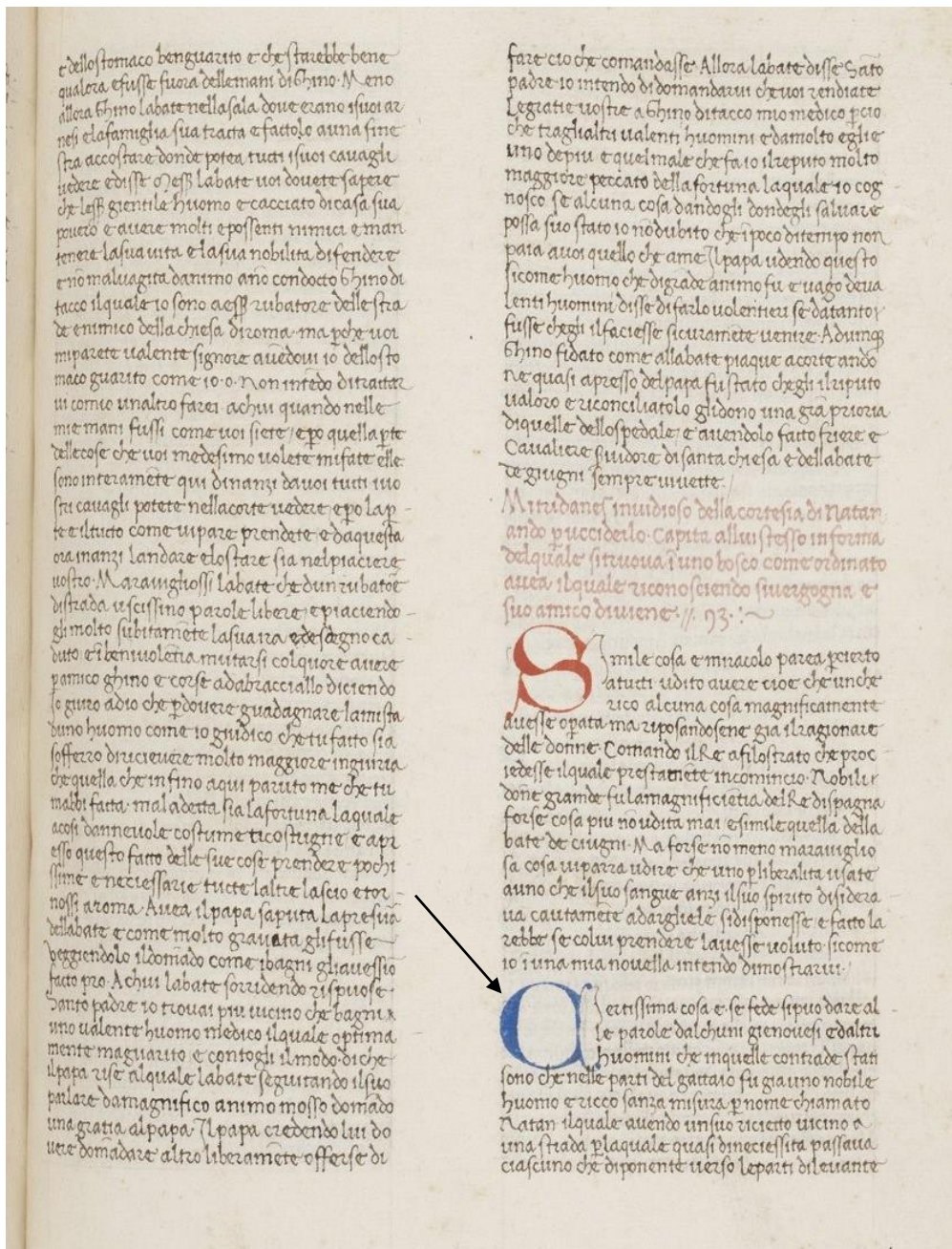


図2 「ナタンとミトリダネス」冒頭箇所 (BnF ital. 484, f. 154r. b38~)

Certissima cosa è se fede si puo dare al / le parole d'alcuni ghenovesi e d'altri / huomini che in quelle contrade stati / sono, che nelle parti del Gattaiò fu già uno nobile / huomo e ricco senza misura p nome chiamato / Natan. Il quale avendo un suo ricietto vicino a / una strada per la quale quasi di neciessita passava / ciascuno che di Ponente verso le p
arti di Levante /

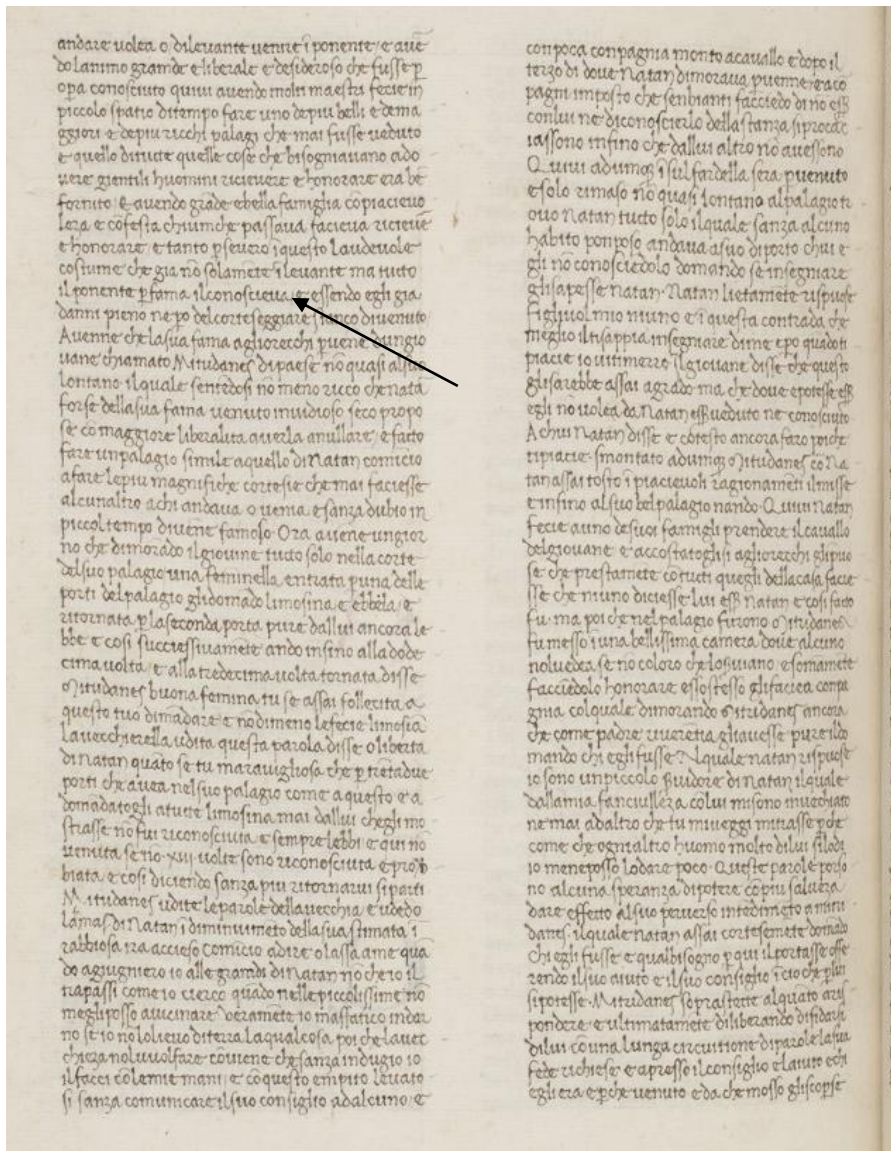


图3 同(続き)(Id. f. 154v. ~a12)

andare volea o di Levante venire in Ponente, e avendo l'animo grande e liberale e desideroso che fusse per / opera conosciuto, quivi avendo molti maestri fecie in / piccolo spatio di tempo fare uno de piu belli e de maggiori e de piu ricchi palagi che mai fusse veduto, / e quello di tutte quelle cose che bisognavano a do/vere gentili huomini ricievere e honorare era be/fornito. E avendo grande e bella famiglia, con piacievole/za e con festa chiu/nche passava faceva ricievere / e honorare. E tanto persevera in questo laudeveole / costume che gia non solamente in Levante ma tutto / il Ponente per fama il conosieva.

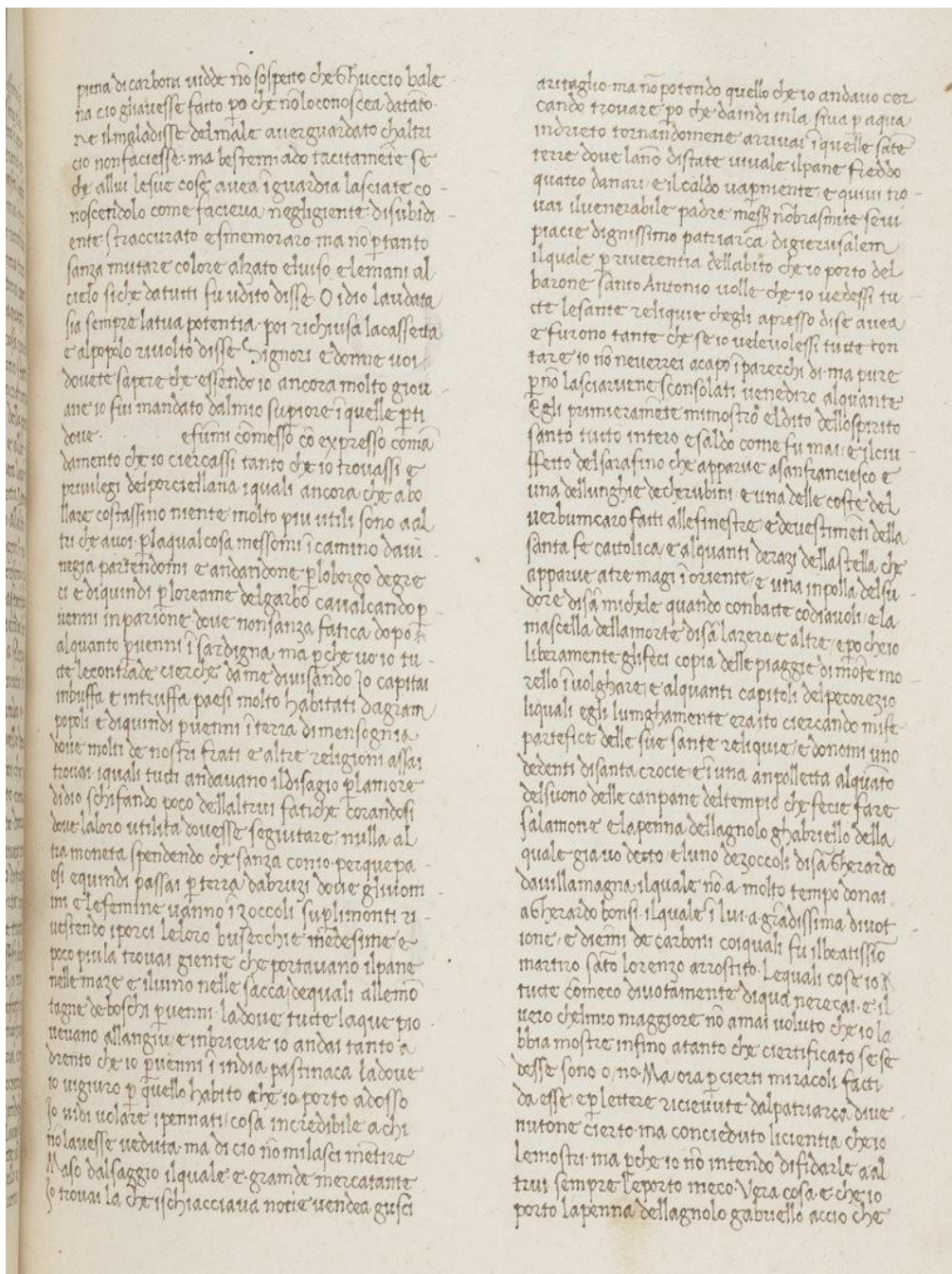


図4 チポツラ修道士の演説冒頭箇所 (BnF ital. 484, f. 102r. a11-18)

Signori e donne, voi / dovete sapere che, essendo io ancora molto giov/ane, io fui mandat
o dal mio superior in quelle parti / dove [appariscie il sole] e fummi commesso con espres
so coman/damento che io cercassi tanto che io trovassi i / privilegi del porciellana, i qual
i ancora che a bo/llare costassino niente, molto piu utili sono a al/tri che a voi.